



冬のハマシギが減少中

守屋年史 (バードリサーチ)



国内のハマシギ越冬数

日本のシギ・チドリ類の総個体数の中で、ハマシギの占める割合は高く、特に冬は約30,000羽が全体の約60%以上を占めます。2016-17年までのハマシギの



写真. 越冬地でのハマシギ

越冬期の個体数変動の指標(図)を見ると、2004-05年頃から増加傾向にあった状態から、2010-11年シーズンを境に減少傾向となっています。シギ・チドリ類の減少については、繁殖の不調、密猟や天敵による捕食、生息場所の消失など、繁殖地、中継地、越冬地で、さまざまな原因が考えられています。越冬地である国内では違法な捕獲の報告はなく、近年、大規模な生息地の減少もありません。冬季の気温の影響により越冬地が南下もしくは北上する事も考えられますが、ハマシギが多数越冬する地域(有明海、八代海、周

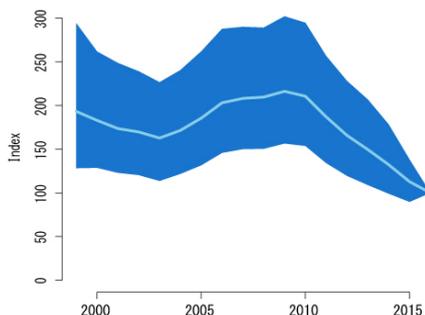


図. ハマシギの個体数指標の変動 (1999-2016年) モニ1000シギ・チドリ類調査 最大個体数のデータを用いて作図

防灘、伊勢三河湾、東京湾)の1月の平均気温は、個体数変動と連動するような変化はありませんでした。

問題は中継地・越冬地?

繁殖地はどうでしょうか? 現在、日本を含む東アジアで越冬する亜種キタアラスカハマシギ(*Calidris alpina arctica*)は、北アメリカの北極海沿岸で繁殖する亜種です。昨年、北アメリカ北極圏内の繁殖地のシギ・チドリ類6種の調査から、生存率の分析結果が報告され、成鳥に関しては雪解けの時期や夏季の気温などの繁殖地の環境は生存率に影響を与えていませんでした。しかし、唯一、東アジアに移動するキタアラスカハマシギのみ低い生存率が示されました(Weiser et al. 2017)。これは、年ごとの変化が大きい極北の繁殖地の環境にシギ・チドリ類は、もともと対応できていると考えられ、キタアラスカハマシギのみ生存率が低いという結果は、移動先の東アジアの中継地もしくは越冬地に、個体群に対する減少要因があると考えられます。東アジアなどでは、生息地減少や密猟がシギ・チドリ類の大きな脅威として報告されており、著者らは当地域での適切な対策が重要になると指摘しています。今後は、国外の中継地・越冬地の保全に協力するとともに、国内でも環境の質の変化がないか減少要因を探り、対策していく必要があります。

引用文献

Weiser, E. L., et al. 2017. Environmental and ecological conditions at Arctic breeding sites have limited effects on true survival rates of adult shorebirds. *The Auk* 135(1):29-43.

GPS-TXを使用したマガモの飛行経路調査

田米希久代（加賀市鴨池観察館）



石川県加賀市の西端にある片野鴨池で越冬するカモ類は、夕方に鴨池を飛び立ち、夜間に加賀市内の水田で採食します。過去には採食地の位置や採食環境の選好性の調査が行われ、カモ類が湛水田を好むことが分かっています。現在もその結果をもちいた保全活動が進められていますが、せっかく湛水してもらってもカモ類が飛来しない地域がありました。その要因が何かはまだ明らかになっていないため、ねぐらから飛び立ったカモがどのような経路をたどって採食地を探し出しているのかを明らかにするための調査を行うことにしました。

マガモの捕獲と追跡

加賀市の伝統猟法である投げ網「坂網」を用いて捕獲したマガモのオス2羽に、GPSによって得られた位置情報を基地局に送信するGPS-TX送信機を装着しました。GPS-TXは群馬県にある数理設計研究所が製作しているシステムで、アンテナと受信機からなる車載型の基地局で送信機からの電波を受信し、インターネットを介してリアルタイムで地図上に位置を表示することができるものです(図1)。送信機は日没前後1時間の間、30秒に1回測位して位置情報を送信します。基地局は起伏に飛んだ加賀市の地形に対応できるように配置しました。追跡は2017年2月13日から同17日にかけて行いました。ID5とID6の送信機をつけた2羽のマガモからは、それぞれ4日間、2日間のデータが得られ、各1回ずつ片野鴨池から採食地(最初の着地点)までの移動全体を追跡することができました。なお、当初は12月の日没(カモの飛立時刻)に合わせて電波の発信開始をセットしていたのですが、マガモの捕獲に成功したのが2月になったため、カモの飛立と発信開始時刻がずれてしまい、今回追跡できたのはこの2羽だけとなりました。

連日、同じ飛行経路で採食場所へ

今回、特に興味深かったのは、2月13日と14日のID6の飛行経路です(図2)。ID6は、14日は片野鴨池から南へ飛び立ち、大聖寺の市街地を回り込むようにして南東方向に向かっていました。しかし、この日は残念ながら最後まで追跡することはできませんでした。翌15日、前日とほぼ同じ経路を飛行し、三谷川右岸の水田に到着しました。ここは三谷川が流れる山あ

いの水田地帯で、稲の有機栽培やふゆみずたんぼが行なわれており、全体的に水がたまっている地域でした。マガモは同じ採食地を数日間連続して使うことがあります。その場合は飛行経路も同じである可能性が示唆されました。

私たちは、以前食べたことのあるおいしい料理を出す店の場所を、「あのビルのある角を曲がってその先の橋を越えてすぐ右手にあったはず・・・」などと記憶していることがありますが、もしかしたら、ねぐらと採食場所のあいだの日々の移動では、マガモも同じように地形を覚えていてそれをたどっているのかも知れません。カモ類の保全には採食地である水田を理解することが重要な課題です。今後も調査を継続し、カモ類が採食地に向かう時の飛行経路選択について明らかにし、地域の農家の方へ「ふゆみずたんぼ」や「あまみずたんぼ」をお願いする際にどの地域から呼びかければよいかを考える時の参考にしたいと思っています。



図1. GPS-TXの送信機(手前)と受信機(奥の黄色いケース)。



図2. マガモ(ID6)の移動経路

オオヒシクイの旅

風車のセンシティブティマップ作成を目指した春の国内渡り経路の解明

森口紗千子（新潟大学農学部）



バードストライク(風車への衝突)や生息地の消失、渡りルートの変更など、国内外で風力発電施設による鳥類への影響について研究が進められています。ガン類のバードストライク事例は海外でも報告例は少ないですが(Rees 2012)、渡り経路上に建設された風車を避けるように迂回したり(Desholm & Kahlert 2005, Plonczkier & Simms 2012)、農地では風車の周辺で採食しなくなる(Larsen & Madsen 2000, Madsen & Boertmann 2008, Rees 2012)などの影響が報告されています。鳥類の保全と風力発電の推進に折り合いをつけるには、鳥類が利用する空間を明らかにし、鳥類があまり利用しない空間に風車の建設を計画できるような地図(センシティブティマップ)を整備する必要があります。風力発電施設の影響評価では、彼らが利用する地域の情報に加えて、渡り経路や飛行高度の情報が重要となります。しかし、ガン類の渡り追跡はまだ例数が少なく、どんな高度で渡っているのかほとんど情報がありませんでした。

渡り時の飛行高度は風車より高め

2017年1月末、新潟県福島潟で3羽のオオヒシクイを捕獲し、携帯電話回線を利用した首環型の送信機を装着・放鳥しました。位置情報は1時間に1回の頻度で取得され、蓄積したデータは1日に1回送信されるよう設定しました。電波の届かない地域では送信機にデータが蓄積され、電波が届く地域に入ると一斉に送信されます。新潟から北海道までの渡りの高度を、3羽合わせて17回取得しました。誤差を考慮しても地上から0~592.3mの高さで渡っていたようです(図1)。送信機を付けた個体は2月上・中旬に秋田県大潟村へ、3月中旬には北海道の中継地に移動しました(図2)。例年よりも大潟村の積雪が多かったためか、一旦南下する個体もみられました。北海道に入ると、古川沼を除いてそれぞれ異なる中継地を利用し、石狩川流域の手形沼や浦臼沼、十勝地方の歴舟川下流域と内陸の足寄湖、十勝川下流域へと分散して4月中旬まで過ごし、その後、電波の届かない地域へと移動したようで音信不通になりました。

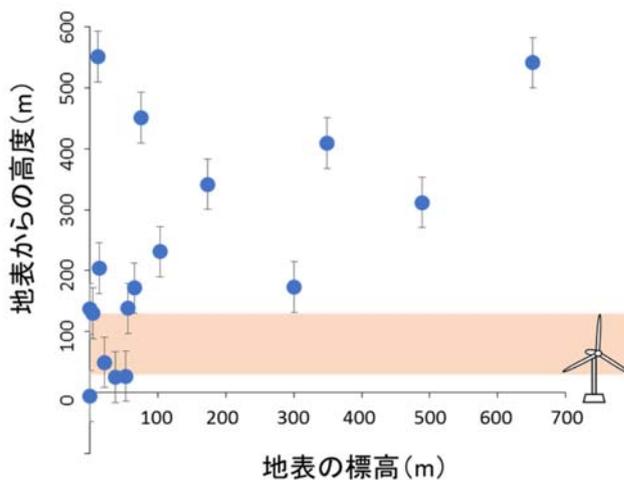


図1. 渡り飛行時のオオヒシクイの高度。オレンジ色の高度範囲は風車の回転域を示す。送信機の誤差範囲は最大値である±41.4mとした。

この研究成果により、新たな中継地のねぐらとして7カ所がみつかるとともに、渡り時の高度は風車回転域よりも比較的高いことなど新たな発見がありました。(本研究は(独)環境再生保全機構「環境研究総合推進費」(4-1603)の委託により行ないました。)

引用文献

Desholm, M. & Kahlert, J. (2005) *Biology Letters*, 1, 296-298.
 Larsen, J.K. & Madsen, J. (2000) *Landscape Ecology*, 15, 755-764.
 Madsen, J. & Boertmann, D. (2008) *Landscape Ecology*, 23, 1007-1011.
 宮林 泰彦(編)(1994) ガン類渡来地目録.第1版. 雁を保護する会, 若柳, 316pp
 Plonczkier, P. & Simms, I.C. (2012) *Journal of Applied Ecology*, 49, 1187-1194.
 Rees, E.C. (2012) *Wildfowl*, 62, 37-72.

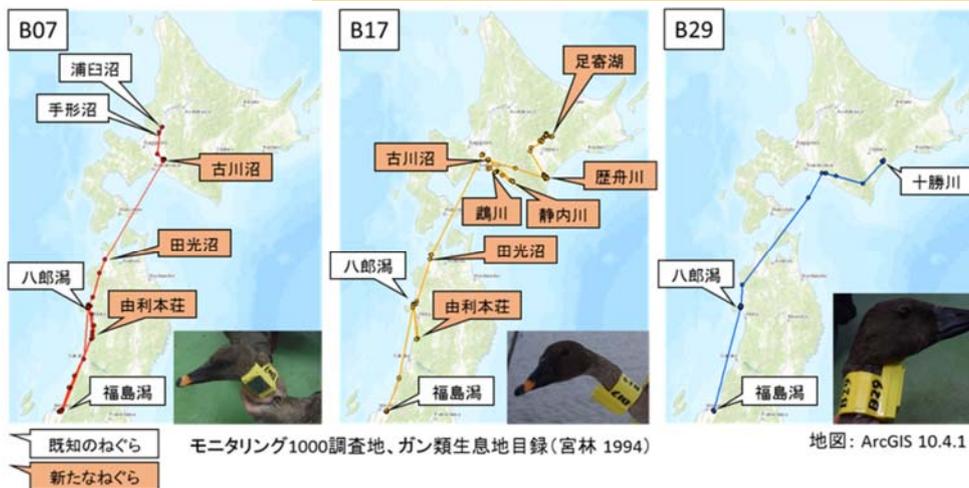


図2. オオヒシクイの春の渡り経路。左上は個体番号。地名は2日以上滞在したねぐら。既知ねぐらはモニタリング1000とガン類生息地目録(宮林1994)でヒシクイ類の記録がある生息地を、新たなねぐらはそれ以外の生息地を示す。

演技派な鳥類の進化

西條未来（総合研究大学院大学）



チドリ目の中には、雛を守るために自らが囹になり、捕食者を引き付ける行動をとる種がいます。小さな鳥が一生懸命に自分の子供を守るために頑張る姿は涙ぐましいものがあります。擬傷行動は、一体どのような種で進化してきたのでしょうか。今回の研究では、チドリ目の対捕食者行動の進化的・生態的な決定要因を明らかにしました。

チドリの擬傷行動とは

チドリ目の多くは、河原や砂浜などの開けた場所の地上に巣を作ります。そのため、チドリ目の雛や卵は強い捕食圧にさらされることになります。親鳥は雛や卵を守るために、様々な対捕食者行動を進化させてきました。例えば翼が折れたようにみえる振りをし、敵の注意を引き付ける擬傷行動(injury feigning)です(写真1)。親鳥は激しく鳴きながら、地上で翼を広げ、バタバタと動き回ります。その姿は翼が折れて飛べない鳥そのものです。はたから見るととても荒ぶっているように見えますが、バタバタしながらも冷静に捕食者の動きを観察しているようです。捕食者が擬傷に興味を示さないと、捕食者との距離を縮めてさらに激しく擬傷をします。偽抱卵(false brooding)という行動をとることもあります。巣から離れた何もないところで、親鳥はまるで抱卵するかのように座ります。卵を狙う捕食者は、巣がある振りをする親鳥に騙されて、本来の巣から離れていってしまいます。

Photo by リトル・ターン・プロジェクト



写真1. コチドリの擬傷行動

擬傷行動はどのような種で進化する？

チドリ目の対捕食者行動は、大きく2つに分けること

ができます。1つ目は、モビングや威嚇などの攻撃行動です。2つ目は、前述した擬傷行動や偽抱卵などはぐらかし行動です。

私は、この2つの行動の進化的・生態的な決定要因について、チドリ目158種の過去の論文にある行動データから、系統種間比較という手法を用いて分析を行いました。その結果、体サイズの大きい種は攻撃行動、小さい種ははぐらかし行動をとりやすくなることがわかりました。これは、体サイズが大きい種の方が、雛・卵の防衛成功率が高く、小さい種は正面切って捕食者と対峙しても負けてしまうからだと考えられます。また、コロニー性の種は攻撃行動をとり、はぐらかし行動をとらなくなるように進化することがわかりました。コロニー性の種は集団でモビングが出来るので、効率的に捕食者に攻撃ができるためだと考えられます。木の上や崖の隙間などに巣を作る種は、はぐらかし行動も攻撃行動もほとんどしないことがわかりました。木や崖は地上に巣を作る種と比べて捕食圧が低いいため、営巣場所の選択自体が一つの対捕食者行動になっていると考えられます。

擬傷をするチドリがいるところには

擬傷行動は体の小さな鳥の精一杯の防衛行動です。擬傷行動をするチドリがいるところには、チドリの雛や卵があります。雛や卵は砂地や石と同じような色、形をしています(写真2)。擬傷しているチドリを見かけたら、雛や卵を踏まないように気を付けて、そして頑張っている親鳥を心の中で応援してあげてください！



写真2. コチドリの巣

千鳥浜・木屋川河口 -シギ・チドリ類調査サイト紹介-

梶畑 哲二 (しものせき自然生態系サポートワーク)

山口県下のシギ・チドリ類

山口県下の干潟は山口県外海試験場の調査により、周防灘西部、南部、東部及び伊予灘、安芸湾と大きく5範囲に区分されています。そして干潟は周防灘に大規模な干潟が集中しています。日本海側には大きな干潟はなく油谷湾に小規模な干潟が見られます。また、各地の中小河川の河口にも干潟は見られますが、一般的に小規模です。

シギ・チドリの生息環境として、干潟と淡水の棲み分けが見られます。岩国市の尾津はハスの生産地として現在も広く栽培され、淡水性のシギ・チドリの重要な生息地となっています。下関市JR小月駅裏に15年前まで20haのハス田があり、タカブシギ、ツルシギ、ウズラシギ、タシギなど淡水性のシギ・チドリ類の生息地となっていました。耕作放棄により現在では荒地と化してしまいました。淡水性のシギ・チドリ類は、早場米の植付けの始まる4月下旬～5月上旬の田植期に観察されますが種類、数ともに少なくなっていました。

千鳥浜・木屋川河口

千鳥浜は周防灘に面し、木屋川(2級河川)と神田川が流入し湾奥部に発達した干潟です。3～4m前後の干満差があり、瀬戸内海で



写真1.
チュウシャクシギ・オバシギの群れ(千鳥浜)

も随一の大規模な干潟です。千鳥浜(679ha)と隣接する山陽小野田市(320ha)の全体の干潟面積は1000haに及びます。

当地の干拓の歴史は古く、現在、海岸線は周りを堤防に取りまかれ自然海岸は全く見当たりません。また、後背地の開発も行われ塩性湿地やアシ原の減少等、野鳥の種類、数共に減少しています。千鳥浜は砂質干潟でカニを餌とするチュウシャクシギの渡来が特に多く、毎年、春期には400～500羽をカウントすることが出来ます。過去最多渡来数は2005年、春期

の935羽が最大でした。広大な干潟が渡来の条件になっていると思います。

1970年以降の干潟保護運動の末、1999年には乃木浜総合公園内に3haのアシ原を配した湿地、乃木浜野鳥公園の造成に成功しました。現在、狭いながらも昔は各所に見られた塩性湿地を思わせる乃木浜野鳥公園は、地域の唯一のバード・サンクチュアリーの役割を果たしています。今後、乃木浜野鳥公園を中核として干潟保護活動の拠点にしたいと考えています。また千鳥浜は対岸の曾根干潟に30km、山口湾干潟に40kmと近く、共に周防灘に位置する三箇所の干潟は、今後、瀬戸内海に残された大規模干潟として注目される事と思います。

干潟の利用と今後

干潟は海の浄化作用に大きな役割を果たしています。千鳥浜はハマグリ、アサリ、ノリ等の養殖事業の場として利用されていましたが、漁業者



写真2.
ヘラサギ・クロツラヘラサギ(木屋川河口)

の老齢化等により干潟漁業は衰退の道を歩んでおり、輸入貝類の畜養が細々と行われているのが現状です。

最近、海水温の上昇に伴いナルトビエイが干潟に集中し、貝類、カニ、エビ類の食害が大きな問題となっています。一方、干潟にはカブトガニを始め多くの生き物が生息し千鳥浜は県下でも数少ないカブトガニの繁殖地でもあります。

平成23年11月6日にNHKで放送された「さわやか自然百景」山口・千鳥浜では、広大な干潟と干潟に生息する生物の生態が紹介されました。カニ、トビハゼ、シギ・チドリ類等々、太古から生息するカブトガニの産卵、そして孵化の感動的なシーンは初めての事で興味深く視聴しました。

干潟漁業再開の為にも干潟を再生し、再び漁業の場としての利用こそ、貴重な干潟を開発から守る最大の課題と思っています。また、干潟の重要性を多くの人達に知らせる活動は私達の使命だと考えます。

どこからきて、どこへいく？

日本で繁殖するコチドリとシロチドリの渡り

笠原里恵（弘前大学）

知られざる内陸の渡り

日本でシギ・チドリ類というと、越冬地と繁殖地を行き来する長い渡りの中で、いっとき干潟や湖沼を利用する種がほとんどですが、コチドリやシロチドリなどの一部の種は、日本でも繁殖しています。これら2種の繁殖環境は、内陸の河川の砂礫地や海岸の砂浜ですが、このような環境は全国的に減少傾向にあります。渡り鳥である彼らの繁殖個体群の維持を考える上では、繁殖地の環境とともに、渡り経路も検討する必要があります。しかし、これらの種が国内の繁殖地までどのように移動してくるのかは、ほぼわかっていません。

そこで、この春から、東京都市大学の北村亘講師、山階鳥類研究所の森本元研究員と共同で、シロチドリとコチドリについて渡り経路の調査を開始しました。渡り経路を明らかにすることで、越冬地や重要な中継地を把握し、包括的な水辺環境の保全の提案に役立てていきたいと考えています。

小型GPSによる追跡

近年、小型GPSや、日の出と日の入りの記録から個体がいいた緯度経度を推定するジオロケーターなどによる追跡などから、体の小さな鳥たちの渡り行動が追跡できるようになってきました。例えば、コチドリでは、スウェーデン南部で繁殖した個体群の秋以降の移動をジオロケーターの記録から推測したところ、移動経路も越冬地も個体によって大きく異なり、その範囲は北アフリカから中東、遠くはインドまで、非常に多様であったという興味深い研究があります (Hedenström et al. 2013)。

今回私たちが使用したのは、ある時点での個体の緯度経度が直接記録される小型GPSです。これを、長野県と東京都の調査地で捕獲した個体の背中に装着し、あわせて個体識別ができるように色足環も装着しました(写真)。

一般に、追跡機器の重さは、鳥の体重の3%もしくは5%以内におさめることが提案されており (Barron et al. 2010)、今回使用したGPSも、対象2種の体重の4%以下に収まるようにしています。GPSといっても、

衛星追跡のように個体の位置データが随時送られてくるわけではなく、本体に蓄積されるタイプなので、翌年帰還した個体を再度捕獲して、データを回収する必要があります。

私たちの研究は、まだ立ち上げたばかりですが、来年、帰還した個体から渡り経路のデータを得ることが出来たら、皆さんにご報告したいと思います。

目撃情報提供のお願い

九十九里でのシロチドリ調査(守屋 2016)や長野県でのコチドリ調査(笠原 未発表)からわかっている2種の帰還率は約3割です。来年、GPSを装着した個体が調査地に無事に戻ってきてくれること切に願うわけですが、他の繁殖地に移動する可能性もあります。そこで、皆さんにお願いがあります。GPSや足輪を装着したシロチドリ、もしくはコチドリを目撃した際には、是非、情報をお寄せください。どうぞよろしくお願いたします。

連絡先E-mail: [skasahara0713\(at\)gmail.com](mailto:skasahara0713(at)gmail.com)

メール送信の際は(at)を@に変更してください。



写真. 小型GPSと水色のリングを装着したシロチドリ。背中から斜め後方にアンテナが伸びているのがわかる。

引用文献

- Barron DG, Brawn JD & Weatherhead PJ (2010) Meta-analysis of transmitter effects on avian behaviour and ecology. *Methods in Ecology and Evolution* 1: 180–187.
- Hedenström A, Klaassen RHG & Åkesson S (2013) Migration of the Little Ringed Plover *Charadrius dubius* breeding in South Sweden tracked by geolocators. *Bird Study* 60: 466–474.
- 守屋年史(2016)九十九里浜のシロチドリの行き先は？バードリサーチニュース(<https://db3.bird-research.jp/news/201610-no3/>).

ドローンを使ってカモを数える

神山和夫（バードリサーチ）



大きな湖沼でガンカモの調査をするとき、群れが遠くにいて数も種類も判然としないということがあります。そこで、ドローンを飛ばして群れの真上から写真を撮れば調査ができないだろうかと考えて、今年の10月初めに北海道でカモの群れを空撮してきました。そのときの写真を見ながら、カモ類のドローン調査について説明しましょう。

望遠鏡ではスジ詰めに見えますが



写真1. ポロ沼の岸から望遠鏡で見たカモの群れ。

写真1は北海道北部のポロ沼で1.5kmほど遠方にいるカモの群れを望遠鏡で見たようすです。数えてみようとしたのですが、望遠鏡に顔が触れてわずかに揺れるだけでも視野が大きくぶれ、カウントすることができません。そこでドローンを群れに近づけて撮影したところ、望遠鏡ではカモ同士がぶつかりそうなほど密集して見えていたのが、実際にはけっこう個体間距離があるようでした。望遠鏡では識別が難しかった種構成も、一番多いのはスズガモで、他にはオナガガモとヒドリガモがいることが分かりました。あとは、高い高度からこの群れの全体が写るような写真を撮ってカモの総数を数え、近い位置からの撮影で分かった種数比で按分すれば、種別個体数を大まかに推定することができます。

雄ばかりのカモの群れ

写真2はポロ沼の隣のキモマ沼で撮影したスズガモだけの群れです。カモたちは両方の沼を行き来していると思われませんが、この日は風が強く、スズガモとオ



写真2. キモマ沼のスズガモの群れ。

ナガガモの群れに分かれて、風を避けるために風上の岸近くに集まっています。写真2で見てもスズガモはオスが多いのですが、キモマ沼で密集している群れに近づいて撮影すると、スズガモはほとんどが繁殖羽に変わったオスで、オナガガモもエクリプスのオスの群れでした。カモ類はメスだけがヒナを育てるため、オスはメスが抱卵を始めると繁殖地を離れて換羽地と呼ばれる場所に集まり先に換羽をしますが、その群れがまとまって渡ってきたのかもしれない。ただ、ポロ沼ではオス・メスが一緒にいたので、オスだけが離れてキモマ沼に来たのだとしたら、この小群が移動単位ということでしょうか。不思議です。

撮影した写真を数えるのが大変

さて、空撮した写真から簡単に数がわかりそうな気がしますが、実はここに難関があります。目標物のない水面では複数の写真をつなぐことが難しいので、群れ全体が1枚の写真に収まるように撮影しないといけません。ポロ沼の群れの直径は350mで、これを1枚の写真で撮ると、個体サイズはケシ粒ほどになります。それを1日ばかりで数えて4,801羽 いることがわかりました。次に群れの10カ所を低空で撮った写真からスズガモの割合が0.8038と分かったので、群れ全体でスズガモの数は4,801羽、それ以外のカモ（オナガガモとヒドリガモですが、小さく写っていて正確な識別が困難でした）が1,172羽となりました。ひとつの群れを数えるのに丸1日かかりましたが、これまで望遠鏡で見ても種類さえ分からなかった遠方のカモの群れについて種別で概数を把握できるため、ドローンは有効な調査ツールになると考えています。

[文と写真を一部修正しました 2019/02/12]

アジア湿地シンポジウム2017に参加してきました

奴賀俊光（日本野鳥の会／バードリサーチ）



Photo by Eugene Cheah

写真1. サイドイベントにはたくさんの方が来てくれました

日本の事例を共有

2017年11月7～11日まで、佐賀県で行われたアジア湿地シンポジウム2017(Asian Wetland Symposium 2017、以降AWS)に参加してきました。AWSは、湿地の管理に携わる国、地方政府、NGO、研究者、民間企業など多様な人々がアジアの湿地の保全、持続可能な管理、賢明な利用に関するお互いの知識、知恵、経験を共有し、学ぶ機会を提供する場です。

その中で、干潟の減少や干潟を生息地とする渡り鳥が直面する問題について、日本の事例を異なる世代・地域間で共有し、今後の干潟保管理について考えることを目的に行われたサイドイベント「Population Decline of Migratory Waterbirds and habitat changes - Shorebirds as Indicators(渡り性水鳥の減少と生息地の環境変化-シギ・チドリ類とその生息地の干潟を指標に)」に参加し、発表してきました。

まず最初に、有明海の漁師さんがかつての豊かな海での人と渡り鳥の暮らしと、現在の豊かさを失った干潟の現状をビデオメッセージ(<http://tokyo.birdlife.org/archives/news-and-world/news/14100>)で語られました。それを受けて、「Decline of Shorebirds: 40-Year-Nationwide-Data in Japan」(奴賀俊光・守屋年史・柏木実)というタイトルで、日本のシギ・チドリ

類調査の歴史や、埋め立てにより干潟の40%が失われた日本では、干潟を生息地としていたシギ・チドリ類も激減したという事例を紹介し、シギ・チドリ類の保全には生息地の保全が必要だということを参加者に訴えかけました(写真1)。続いて、Wetlands International-ChinaのChen Kelinさんの講演は、黄海での水鳥調査の結果、119種、約80万羽の水鳥が利用する重要な湿地であるが、開発による干潟環境の悪化・消失や渡り鳥の生息地の減少が問題となっており、環境型社会の構築を推進する中国の新しい国家戦略において、湿地とその多様性を守ることが緊急で重要であるというお話でした。谷津干潟自然観察センターの芝原達也さんは、都市部の湿地管理についての情報共有として、湿地の保全と賢明な利用を推進するための谷津干潟自然観察センターのとりくみを紹介しました。最後の議論では、会場からの意見も踏まえ、干潟やシギ・チドリ類の保全には、各地域の現状や、他国に先行して長期モニタリングを行っている日本の事例と結果などの情報共有と、各地域、国がお互いに協力することが重要であるというまとめで終了しました。



Photo by Eugene Cheah

写真2.
講演者(左から、芝原さん、Chenさん、奴賀)

共同声明 Saga statement

最終日にAWS参加者一同で作ったSaga statementには、諫早干拓が有明海に深刻な影響を与えていること、これを教訓として有明海も含めた湿地生態系の保全・回復に取り組むことが必要であるということが盛り込まれました。AWS2017のプログラムや要旨、Saga statementの詳細はこちら(<http://aws2017.org/jp/index.html>)からご覧になれます。

バードリサーチ 水鳥通信 2018年1月号(19号)

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

発行者: 植田睦之

URL: <http://www.bird-research.jp>

編集者: 神山和夫・守屋年史

タイトル写真募集中!

ご提供いただける方は
写真を電子メールにてお送りください!

このニューズレターはFSC認証紙を使用しています。